

令和7年2月25日

須賀川市議会議長 佐藤 瞭二 様

須賀川市議会 新政会

代表 市村 喜雄



視 察 研 修 報 告 書

先に実施した視察研修概要について、下記のとおり報告いたします。

記

- 1 期 日 令和7年2月4日（火）
- 2 視 察 先 (1) 福島県双葉郡富岡町 東京電力廃炉資料館
(2) 福島県双葉郡大熊町・双葉町 東京電力福島第一原子力発電所
- 3 視察内容 東京電力福島第一原子力発電所の廃炉について（現地視察）
- 4 参 加 者 市村喜雄（代表）、鈴木正勝、石堂正章、鈴木洋二、柏村修吾
- 5 概 要 行政調査日程及び調査内容は別紙添付資料のとおり



「福島第一原子力発電所の廃炉について」

- 1 日 程 令和7年2月4日（火） 午前9時30分から
- 2 場 所 東京電力廃炉資料館
東京電力福島第一原子力発電所
- 3 説明者 福島第一廃炉推進カンパニー 廃炉コミュニケーションセンター
視察コミュニケーショングループ 課長 大橋 克明 氏
福島復興本社 復興推進室広域グループリーダー 課長 大竹 一典 氏
課長代理 末松 さとみ 氏
東双不動産管理株式会社 事業運営部 視察運営グループ 佐野 哲也 氏

4 概 要

2011年（平成23年）3月11日14時46分に発生した東北地方太平洋沖地震およびこれに伴う福島第一原子力発電所事故による大規模な地震災害の被災地と原子力発電所の廃炉の現状について視察してきました。

廃炉資料館では原子力発電の仕組み、地震発生時から原子力発電が水素爆発するまでの過程の説明を受けました。また地震発生時の現場で状況などを映像で説明を受け現場で対応していた方々の生々しい様子が言葉では表せないほど大変な状況でありました。

廃炉に向けての様々な機器の説明を受けた後福島第一原子力発電所に移動しました。

現場では廃炉に向けた取組の説明を受けた後原子力発電所を案内していただきながら説明を受けました。

現場には現在使われていない部品が野積みになっています。また汚染水のタンクが数多く設置されていました。

汚染水については海洋放出が進めば数が減ってきますがかなりの年数が必要になります。ALPS 処理された処理水は基準値をはるかに下回るレベルまで綺麗に処理して安全性を確認できました。

水素爆発した原子力建屋は少しずつ解体に向けた工程を進んでいますが燃料棒のプールがあるためまだまだ時間が必要になります。

メルトダウンした原子炉の処理はもっと複雑な工程を踏まなくてはならないため今後30年以上の年月がかかります。

安全でクリーンなエネルギーの原子力発電ですが一度事故があるとこの様な被害になる事を私たちも自覚しなくてはなりません。

5 所 感

《市村 喜雄》

現地視察のはじめに東京電力廃炉資料館において、原子力事故の事実と廃炉事業の現状等を確認後、福島第一原子力発電所の視察を行った。まず、原子力発電の基本情報の説明を受け、映像シアターで地震発生から原子力事故とその対応を映像で確認、地震発生から電源復旧までの 11 日間を映像と説明を受け、映像にて津波で全電源を喪失した 1・2 号機中央制御室の事故当時の様子を振り返り、事故の反省と教訓、事故対応に当たった署員の思いを映像で生の声として確認した。原子炉建屋内での燃料取り出し・燃料デブリ取り出しの作業状況を映像で、その後汚染水対策と汚染水を処理することで発生する処理水への対策の映像での確認、廃炉作業で実際使用した遠隔ロボットの紹介などを受ける。その後、廃炉資料館から第一原子力発電所へバスで移動、発電所内視察へ。

使用済み燃料プールからの燃料取り出し作業、燃料デブリの取り出しに向けた作業、燃料の安定冷却、汚染水対策、処理水対策、放射性固体廃棄物の管理など、現場を視察しながら説明を受けた。作業員が一日平均 4,300 人の多さには驚いた。1～4 号機の状況から今後 30～40 年後の廃止措置終了までの計画的かつ安全対策を怠らない状況が確認できた。

《鈴木 正勝》

最初に、東京電力廃炉資料館にて、原子力事故の記憶と記録が見える化した映像を柱とした展示にて、事故の全体像と廃炉へ向けた事業の状況を、大橋克明視察コミュニケーショングループ課長、大竹一典復興推進室広域グループチームリーダー課長等の案内を受け館内展示の説明を受けながら、質疑応答を行いました。

説明では、県内外、国外からの視察の申請依頼が数多くあり、出来るだけ対応に努めているとの事でした。

次に、第一原子力発電所へ移動し、施設内会議室で 1 号機から 4 号機の状況と廃炉へ向けた燃料の取り出し、ALPS 処理水の海洋放出等について説明を受けてからバスにて施設内を移動しながら説明を受けましたが、その途中で 1 号機から 4 号機側のブルーデッキでは降車して使用済み燃料プールからの燃料取り出し状況について説明を受け質疑応答を行いました。

また、5 号機から 6 号機側のグリーンデッキにて降車して、現在の取り組み状況と安全確保のための処理水の海洋放出設備、新たな防潮堤等の説明を受け質疑応答を行いました。

施設全域での廃炉へ向けた作業現場の状況や安全管理について、建屋近くでは依然線量が高い状況や処理出来ない機材資材がある中での作業となっており、事故の深刻な被

害状況と作業の難しさを確認することができました。

また、このような中で毎日約 5,000 人の作業員が働いている状況下における労働環境の改善も図られておりました。

廃炉へ向けた中長期ロードマップでは、廃炉措置終了までの 30 年から 40 年後を見据えた取り組みがなされております。

私は、事故前に 1 度、事故後は今回で 3 度目の視察となりますが、調査を通して、改めて、いったん原子力事故が発生すると取り返しのつかない事態になるとのリスクを認識していくことが重要と感じました。

また、この原子力事故の教訓をいかし、あらゆる災害に対する備えの大切さを実感しており、これからの須賀川市政においても出来る備えを市民と共有していく上で、大変重要な調査となりました。

《石堂 正章》

今回新政会は、東日本大震災の地震、大津波を発端として発生した東京電力福島第一原子力発電所原子炉事故からの復旧の現状について施設視察を行いました。

最初の視察施設である「東京電力廃炉資料館」において、様々な問題を抱えながら廃炉に向けての現状についての説明を受けましたが、説明を担当される東京電力の関係者の方は、まず初めにお詫びから始まり、終始真摯な態度での対応でしたので、その対応に対しましては、とても感銘を受けました。

その説明では、現在廃炉作業に従事している作業員は、1 日当たり約 4,000 人以上、その内の約 70%の方が福島県の方々であるということなどをお聞きしました。

地元福島県の方々の働き場所と仕事が確保されているという状況は有り難いと感じましたが、一方では複雑な感情も有りました

今回の原子力発電所の事故は、東日本大震災の地震と、それに続いて発生した大津波に起因しておりますが、その発生した事故により結果として非常に多くの住民の方々の日常生活が奪われ、今でも故郷に帰れずに、無念にも災害関連死として亡くなられた方々も数多く存在しておりますので、この事実の前には、残念ながら今回の施設視察で受けました説明に対しましては、理解を持ちながらも、複雑な気持ちを持たざるを得ませんでした。

廃炉資料館での説明の後に視察しました原子力発電所の事故現場の状況は、14 年近く経っている今でも悲惨な状況であり、そこには解決すべき問題が数多く存在しており、これからも長く続くであろう廃炉までの道のりがとても険しいものであることを、改めて認識し、その課題の複雑さ大きさを確認しました。

願わくは、廃炉までの長く続く作業においては、今後また発生するかもしれない自然

災害への対処、そして廃炉までの工程作業における全ての事故に対しましての回避対応に、最大限に注意を払いながら、安全第一の体制が維持されることを期待しております。

福島県民の一人として、この廃炉に向かう道程に対しては可能な限り、その時々的情報を収集し、決して忘れること無くその状況に注視していくことが重要であると感じましたので、次世代まで続くこの「東京電力福島第一原子力発電所事故」に対する憂いを忘れずに、継続して、定期的に情報収集を行っていきたいと思います。

併せまして、数年後に改めてこの東京電力福島第一原子力発電所を訪問したいという思いを持って施設視察の所感報告といたします。

《鈴木 洋二》

2011年（平成23年）3月11日14時46分に発生した東北地方太平洋沖地震およびこれに伴う福島第一原子力発電所事故による大規模な地震災害の被災地と原子力発電所の廃炉の現状について視察してきました。

あの巨大地震から14年がたち原子力発電所まで行く景色は当時から復興が進んでいないと感じました。また避難されていた住民の帰還には大変課題が多くあると感じました。住民の皆さんも時間の経過とともに現状の生活環境が出来上がり益々帰還しにくいと感じます。

廃炉資料館では地震発生時の現場で状況などを映像で説明を受け現場で対応していた方々の生々しい様子が言葉では表せないほど大変な状況でありました。また、原子力発電所の水素爆発に伴い緊急避難の様子も映像もあり住民の皆さんの大変さが改めて感じました。

廃炉資料館での説明を受け、原子力発電所の現場に移り説明を受けてきました。現場での作業は当時大変な状況でありましたが、現在は防護服を着ない様になりました。廃炉に向けての工程はまだまだこれから30年以上かかるとのことで、原子力発電所事故がおよぼす影響の大きさに驚くばかりです。爆発した原子炉建屋を見ると爆発時の衝撃が伝わってきます。

私たちは便利に電気を使っていますが、クリーンなエネルギーの原子力発電の怖さを再認識して電気を利用しなければなりません。

《柏村 修吾》

東京電力廃炉資料館で震災後の経緯について説明を受け、14年の間に政府と東京電力や関係機関とのやり取りを聞き地元はもとより、福島県や日本国内・海外に至るまでの対応についての苦労や今後の対応について説明を受け、廃炉に向け30年～40年という長い年月をかけ、責任をもって対応していくことを確認できた。

午後、大熊町にある福島第一原子力発電所において廃作業の現場を視察。厳重なセキュリティを受け個人の線量計を持たされバス乗車する。視察専用のバスの中にも線量計が設置されており、移動中もその線量計の数値が変化することに驚き、さすがに第一号機近くで降車し屋外の見学場所（1号機から80mの距離）で設置してある線量計の数値には驚かされたが、長時間いなければ問題はなく、担当者は年間250回説明を実施しているが健康には問題ないとのこと（施設内では健康診断を月に1回実施して部署をローテーションしている）。また、2番目の室外見学場所は5号機・6号機の近くで、処理水の放出場所で排水管は直径9cmの太さしかないことに驚かされるが、今後状況に応じて改良されるとのこと。

実際に現場を視察し関係者より現在の状況や今後の取り組みについて説明を受けることにより、日本が他国の汚染処理水の対応よりはるかに安全であることが理解できた。また、IAEAの関係者も一年に一度視察にきて安全について確認するとのこと。

今回の視察をして「これから何年に一度視察がいいのか」と尋ねれば「毎年日々変化しているので状況を確認してほしい」と自ある返答が返ってきた。報道では見られない充実した視察でした。

6 視察風景

